2024年4月28日（日）主日朝礼拝説教

『必ず実現する言葉』井上隆晶牧師
イザヤ書55章6～11節、ルカによる福音書24章36～49節

❶【復活のからだとは？】

今日で復活の話は五回目になります。エマオの旅人に姿を現したイエス様は、今度は弟子たちが集まって、イエス様の話をしているところに現れました。彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思いました。（37節）イエス様は彼らに「**なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか**」（38節）と言われ、「**わたしの手や足を見なさい。まさしく、私だ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがある。**」（39節）と言われました。亡霊や幽霊は、霊ですから触れることができません。しかし復活の体というのは、単なる霊ではなく、天的な身体、天に属する身体を持っているのであって、触れることができるのです。「**まさしく、私だ。**」という言葉に注意しましょう。イエス様は別人ではないしるしとして、釘跡のある手と足を見せられました。復活前のイエス様と、復活した後のイエス様は同じイエス様です。世界にただ一人の、唯一のイエス様です。復活の体というのは別の新しい人間が創造されるのではなく、同じ人の体が変化、変容することなのです。全く別の人が創造されるなら、前の人、前の肉体は役に立たないので捨てられることになります。しかし神が創られた者につまらないものなどありません。どんなに障害をもって生まれても、それは神の意志であり、神の創造の業です。神の力はそんなに弱くはありません。**不完全で欠けがあり、歪み、傷つき、衰えた体であったとしても、それをすばらしいものに、完全なものにする力があります。救いは死をもって終わることはなくずっと続いており、つながっているのです。**
更に、彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので「**ここに何か食べ物があるか**」（41節）と言われ、焼いた魚を取って彼らの目の前で食べられたというのです。日本では仏壇に供え物をしますが、先祖の霊がそれらを食べる事はありません。彼らは霊だからです。しかし復活したイエス様は、この世の物を食べたというのです。天ともつながっていますが、この世ともつながっているということでしょう。イエス様は天と地の両方の性質を持つ者です。ゆえに、天と地を自由に行き来し、天と地をつなぐことが出来るのです。だから地でキリストを拝む時、私たちは天と出会うのです。

❷【人間には永遠を求める心がある】

今、新緑のとても美しい時期になりました。木々の緑を見ると、命っていいなあ～と思います。そして過ぎ去っていった若々しさを思います。神様の被造物は美しく、またもろく、悲しみを含んでいます。

●ザドーンスクのティーホンは語ります。「私は幼児だったが、これも通りすぎて

いった。私は少年であったが、これも過ぎ去った。私は青年であったが、これも私から去った。私は強健な男であったが、私はもはやそうではない。今私の髪は白く、そして老齢のために衰えているが、これも過ぎ去ってゆく。私は私の終末に近づき、すべての肉体あるものにふさわしく死んでゆく。私は死ぬために生まれた。私は生きるために死ぬ。「おお主よ、あなたの国で私を覚えていてください。」……賞賛と非難、栄光と不名誉、そのいっさいが通りすぎた。世の中とはそのようなものである。…何もかも時と共に消える。私たちの過去が夢のように、それと共に私たちのいっさいの昔の幸せが夢のように見える。…神のみ言葉や、私たちの信仰が、私たちに確信させてくれる来世の生活は全く異なるものとなろう。そこではいったん始まった私たちの生活は決して終わることはない。」

私たちの人生はあっという間に過ぎ去ってゆきますが、心の内には永遠を求める思い、変わることのない美しさを憧れる心があります。

●ヘンリ・ナウエンがこんなことを書いています。
私がまだ小さいころ、父と母にいつもこう尋ねたものです。「ぼくを愛している？」あまり何度もしつこく尋ねるので、両親のいらいらの種になっていました。私を愛していると両親は何百回となく言ってくれたのですが、どうしても満足できず、また同じ質問を繰り返しました。それからずいぶんと時がたち、やっと今になって分かるのですが、両親からは得ることのできない満足を私は求めていたのです。それは、永遠の愛で私を愛してくれることを求めていたのです。そのことは「ぼくを愛している？」と質問したあと必ず、「ぼく、いつか死ななければならないの？」と尋ねたことからも分かります。どういうわけか私は、完全な、尽きることのない無条件の愛で両親が愛してくれるなら、私は決して死なないと知っていたに違いありません。…私たちの費やすエネルギーの多くは、つまるところ次の質問に行きつきます。「私を愛していますか？」…私たちの心の痛みの多くは、十分に愛されてこなかったという経験から生まれるのです。…「神は愛です」という単純な言葉は、いったんこれを土台に据えて生きようとすると、はるかに深い意味を持ち始めます。私を創造した神が愛であり、愛以外の何ものでもないなら、人が私を愛してくれる以前から、私は神に愛されていることになります。

私たちを創造したのは両親、つまり人間ではないのです。それは神です。両親も神に創造されました。神は私を創造し、自分に代って愛してくれるように両親に委ねたのです。親の限りある愛よりも先に、神の永遠に続く愛があったのです。

❸【神の言葉は必ず実現することに希望を持とう】

イエス様は弟子たちに言われます。「**わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。次のように書いてある。「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」**（24：44～47）

旧約聖書はヘブライ語で書かれており、その時制は「完了形」と「未完了形」しかありません。神の言葉は成ったか、まだ成っていないかです。神の言葉は、ひとたび口から出されたら、取り消されることはありません。人間なら、間違うこともあり、言ってもそのとおりには行いませんが、神は違います。何年たってもその約束を守り、果たします。イザヤ書にこう書かれています。「**わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。**」（イザヤ 55 章 11 節）神から出た、神の言葉とはイエス様のことです。イエス様は神の望まれることを成し遂げ、その使命を必ず果たします。その使命とは、人間に永遠のいのちを与えることです。「**わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。**」（ヨハネ 6：39）

●サムエル記下 21 章にダビデが王であった時、イスラエルに三年続いて飢饉が襲ったことが書かれています。飢饉は神の怒りのしるしと言われていました。彼が主に尋ねると、先の王サウルが神の約束を破り、ギブオン人を滅ぼそうとしたからだと言われます。**祝福がこの地に及ばないようにするもの、祝福を邪魔するのは人の悪、罪です。それが大地を呪わせます。**そこでサウルの子孫の七名が犠牲になると、地は祝福されました。

今、私たちはイエス様が呪いのしるしである茨の冠をかぶり、すべての呪いを身に負い、犠牲となられました。そのことによって祝福が私たちに及んだのです。キリストの所で呪いは終わり、死も終わり、裁きも終わりました。あの方から赦しと命が始まったのです。私は祝福された地、エデンの園となりました。神は私の中に住み、歩かれるからです。詩編 65 に「**あなたの過ぎ行かれる跡には油が滴っています。荒れ野の原にも滴り、どの丘も喜びを帯びし、…谷は麦に覆われています。**」（詩編 65：12～14）とありますが、この言葉はイエス様によって成就したのです。天に行くまでもなく、地上で既に私はエデンの園を歩いているのです。それを思い出すと嬉しくなるのです。神に感謝しましょう。